

# 『太平記』 光厳法皇行脚記事における和歌利用

——御津の浜での光厳詠を中心に——

大坪 亮 介

はじめに

『太平記』<sup>(注1)</sup> 卷四十「光厳院禪定法皇御斗敷之事付同崩御之事」(以下、「光厳法皇行脚記事」と呼ぶ)は、出家を遂げた光厳上皇の行脚と崩御を語る。すなわち、正平の一統が破綻した後、長らく南朝に幽閉されていた光厳は、正平七年(北朝文和元年(一三五二)、実際には延文二年(一三五七))に帰京を果たす。しかし、世の憂さを思いついた光厳は、「方袍・円頂ノ出塵」となり、「伏見里ノ奥、光厳院ト聞シ幽閑ノ地」に移った。さらに中峯明本の送行の偈に触発され、伴僧を一人連れたさきりで「山川斗敷」の旅に出る。まずは西国を目指し、難波浦、住吉、堺浦を経て、紀ノ川では武士に橋から突き落とされるといふ苦難も経験した末、高野山を訪れる。大塔、奥院への参詣を果たした後、吉野で南朝の天皇と対面した光厳は、丹波国山国へと居を移した。当地で閑寂な日々を過ごした光厳であったが、その「翌年ノ夏比」から発病、「同七月七日」に崩御したといふ。

この光厳の旅と最晩年の日々を語るにあたって、『太平記』は漢詩等に由来すると思われる表現をいくつも用いている。その多くは典

拠未詳である。<sup>(注2)</sup>しかし、筆者は前稿において、光厳が道中で想起したある対句の典故を明らかにした。<sup>(注3)</sup>微細な事実の指摘にとどまったものの、これは当該章段、ひいては『太平記』終結部における表現手法や成立基盤の解明に資することが期待される。

さらに、この詩句は一首の和歌と対になるかたちで引用されている。そのため、当該章段においては、詩句と取り合わせられている和歌そのものについても分析を進めていく必要があると思われる。そこで本稿では、光厳法皇行脚記事において光厳が詠んだとされる一首の和歌に焦点を置き、その典故および当該章段における和歌利用のあり方について論じていくことにしたい。

## 一 叙景と和歌的要素

まず、光厳が問題の和歌を詠む箇所を掲げる。

……先西国ノ方ヲ御覧ゼント思食テ、**接津国難波浦**ヲ過サセ給フニ、**御津ノ浜**松霞渡リ、曙明ノ気色物哀ナレバ、遙ニ是ヲ被ニ御覧ニテ、

誰マチテ御津ノハマ松カスムラン吾ガ日ノ本ノ春ナラヌ世ニ

ト涙汲セ給ヒ、尚難レ過ギト思食タルニ、「望無レ窮水接<sup>三</sup>天色<sup>一</sup>」  
看<sup>不</sup>レ<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>映<sup>二</sup>夕<sup>一</sup>暉<sup>二</sup>」ト云対句ノ、時節ニ相叶タルニモ、「捨ヌ  
世ナラバ何ニ故カ此ル風景ヲモ可<sup>レ</sup>見<sup>一</sup>」ト被<sup>レ</sup>仰ケルモノ物悲シ。  
是ヨリ高野ヲ御覽ゼント思食テ、**住吉ノ遠里小野**へ出サセ給タ  
レバ、焼痕廻<sup>レ</sup>緑テ春谷早ク、松影ノ穿<sup>レ</sup>紅ヲ日脚西ナリ。海天  
野景歩ニ随テ新ナル風流ニ、御足緩ムトモ思食サズ。サテモ銷  
金輕羅ノ茵ナラデハ飯ニモ踏セ給ハザリシニ、深泥湿土ノ最黠  
メルニ玉趾ヲ汚サセ給ヘバ、御供ノ僧ハ仕テ懸シ肘後ノ符ヲ一  
鉢ニ代テ脇ニ掛ケ、今日ハ**堺ノ浦**マデト歩マセ給ヘバ、塩ノ干  
渴<sup>二</sup>群立テ玉藻拾ヒ礫<sup>一</sup>業取ル海人共ノ、各怖<sup>レ</sup>ノ小櫛ヲ刺ズシテ、  
葦間ニ隠レ頭レ礫物取ル様ヲ被<sup>レ</sup>御覽<sup>二</sup>ニモ、貢備ヘシ民ノ營ミ、  
是程ニ身ヲ苦メケルヲ不<sup>レ</sup>知テ、等閑ニ慰ケル事ヨト、今更ニ  
浅増ク思食知セ給フ。頭ヲ廻テ東ニ望バ、雲ニ連リ霞ニ消テ、  
高ク峙テ山アリ。道ニ息メル樵夫ニ山ノ名ヲ問セ給ヘバ、「是コ  
ソ音ニ聞ヘ候金剛山ノ城トテ、日本国ノ武士共ノ数ヲ知ズ討レ  
候シ所ニテ候」トゾ申ケル。「穴浅増ヤ、其合戦ト云モ、我一方  
ノ皇統ニテ天下ヲ諍シカバ、其士卒ノ惡趣ニ墮シテ多劫ガ間ノ  
苦ヲ受ン事モ、必吾罪障ニコソ成ヌ」ト、先非ヲ悔サセ御坐ス。  
(後略。紀ノ川を経て高野山へと至る)

光厳は西国へと向かう旅の途中、摂津国難波浦を通り過ぎ、春霞の  
かかった御津の浜の曙を「物哀」に感じて一首の和歌を詠む。さら  
にその場を立ち去りがたく思った光厳は、眼前の夕景に相応しい対  
句を想起し、「捨ヌ世ナラバ何ニ故カ此ル風景ヲモ可<sup>レ</sup>見<sup>一</sup>ト」との感  
慨を漏らす。前稿で指摘したように、この対句は、光厳と同時代を  
生き、しかも足利直義といった、光厳に極めて近い人物とも交流を

持っていた禅僧龍山徳見の次の詩の一部である。<sup>(注4)</sup>

吞碧樓前景最奇、非ニ登臨者ニ莫ニ能知<sup>一</sup>。望無レ窮水接<sup>三</sup>天色<sup>一</sup>、  
看<sup>不</sup>レ<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>映<sup>二</sup>夕<sup>一</sup>暉<sup>二</sup>。尋伴ニ信鷗衝<sup>レ</sup>浪過<sup>一</sup>、機逢<sup>レ</sup>婦艇得<sup>レ</sup>風宜。  
主翁邀<sup>レ</sup>客倚<sup>レ</sup>欄話、々<sup>二</sup>到<sup>二</sup>三世更時亦移<sup>一</sup>。

龍安山人徳見(龍山徳見)

この詩は、元の禅僧東陵永興が博多妙楽寺にあつた吞碧樓という樓  
閣で詠んだ詩に和韻したもので、東陵永興が来日した観応二年(一  
三五二)八月頃の作と考えられる。この龍山徳見の詩の中から、『太  
平記』は海と山の夕景を描写した三句目と四句目を取り出し、それ  
を御津の浜の夕景に相応しい対句として引用している。

右の引用箇所で見られるのは、『太平記』が朝の景色を和歌に詠  
み、夕景を漢詩の対句を利用して表現していることである。北村昌  
幸氏が指摘するように、『太平記』は和漢の要素を意図的に取り合  
わせる傾向が窺える。和歌と漢詩を並べて引用する箇所も光厳法皇行脚  
記事以外に複数見られ、それらは「まるで二つの文学ジャンルを競わ  
せるような趣き」であり、『太平記』作者は和漢の競演を楽しむ心を宿  
していたに相違ない<sup>(注5)</sup>という。右に引用した光厳法皇行脚記事の当該  
箇所もまた、そうした和漢の取り合わせを意識して叙述されている  
と見るべきであろう。

さらに、引用箇所に四角囲いで示した通り、光厳が旅の途中で立  
ち寄つたとされる場所の多くが、古来著名な歌枕であることも見逃  
せない。光厳は次のような経路で高野山へと至つた。

光厳院↓難波浦(御津の浜)↓遠里小野から堺浦↓紀ノ川↓高野  
山

難波浦(御津の浜)・遠里小野・堺浦までは地名が詳細に示される。

これに対して、その後高野山に至るまでの間で具体的な地名が記されるのは、紀ノ川で地元の武士に橋から突き落とされる箇所だけである。しかも、当該箇所は右に太字で示した歌枕を、最初は和歌と漢詩を組み合わせて、次に「焼痕廻レ緑テ春容早く、松影ノ穿紅ヲ日脚西ナリ」という漢詩由来と見られる表現を用いて、最後に「干渴」・「玉藻」・「磯菜」・「柘ノ小櫛」・「葦」といった、和歌に頻出する表現をちりばめて叙述しているのである。まとめると次のようになろう。

・難波の浦（御津の浜）……和歌と漢詩

・遠里小野……………漢詩

・遠里小野ノ堺浦……………和歌

『太平記』は、こうした和漢の要素を周到に取り合わせて光厳の旅路を描き出しているわけである。さらに、遠里小野から堺浦を目指す道中では、海人の暮らしぶりが和歌的な表現を駆使して語られ、光厳はそうした民の姿を見て「等閑ニ慰ケル事ヨト、今更ニ浅増ク思食知セ給フ」と、民への思いやりが足りなかった我が身を反省するのである。光厳法皇行脚記事においては、従来注目されてきた漢詩由来の表現のみならず、和歌および和歌に関わる表現も重要な位置を占めていることが窺えよう。

## 二 光厳の和歌の典拠

光厳は十七番目の勅撰和歌集『風雅和歌集』を親撰し、当時類勢にあった京極派歌壇を支えた歌人としても知られている。光厳の和歌の中には、民の暮らしぶりに思いを馳せ、我が身を省みるというも

のも複数存在する。<sup>(注9)</sup>前章で見た、高野山までの道中で民を思いやる光厳の姿は、実際に光厳が詠んだ和歌の内容とも響き合っているといえよう。

加えて、『太平記』において光厳が和歌を詠むのは、光厳法皇行脚記事のみである。<sup>(注10)</sup>この点も併せ考えるならば、光厳が難波浦（御津の浜）・遠里小野といった歌枕を経て高野山へ至ったとする光厳法皇行脚記事は、光厳の歌人としての側面と密接な関連を持つと考えられる。そこで次に、当該章段における光厳の和歌について分析を進めていきたい。御津の浜で詠まれた和歌を再掲する。

誰マチテ御津ノハマ松カスムラン吾ガ日ノ本ノ春ナラヌ世ニ  
光厳は、のどかな春の御津の浜を前にして、戦乱の続く日本を「春ナラヌ世」と嘆いている。この和歌に関する先行研究としては、新編日本古典文学全集の頭注が唯一、『万葉集』巻一「雑歌」に収録された次の和歌を「本歌とするか」と指摘している。

山上臣憶良在三大唐一時、憶二本郷 作歌

去来子等 早日本辺 大伴乃 御津乃浜松 待恋奴良武

（山上臣憶良、大唐に在りし時に、本郷を憶ひて作る歌）

いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ

詞書によれば、山上憶良が遣唐使として唐に滞在していた際、故郷を思つて詠んだ歌であるという。傍線部等を付して示したように、この歌には「日本」・「御津の浜松」・「待つ」という光厳の和歌と共通する要素が三つ詠み込まれている。両歌の関連性を看取することができよう。加えて、この憶良の和歌は、『新古今和歌集』や『夫木和歌抄』等にも収録されており、『太平記』と同時代の人々にとっても馴染みのある和歌であったことは想像に難くない。これらよりす

れば、先行研究が指摘する通り、光厳法皇行脚記事で光厳が詠む和歌は、この憶良の歌に基づいているように思われる。

しかし、御津の浜松が詠まれた他の和歌を見ていくと、より直接的にこの光厳詠との典拠関係を指摘し得る歌があることに気付く。鎌倉幕府六代将軍であった宗尊親王の『中務卿親王三百首和歌』「春」巻頭に位置する次の和歌である。

大伴の御津の浜松霞むなりはや日の本に春や来ぬらん（井衣・三弁）

首尾相叶ヒ、姿詞共二調ヒ候。本歌被ニ取成サ一候之体、殊ニ珍重。

御津の浜が霞む様子から春の到来を想像するというもので、光厳の歌と比較すると、「御津の浜松」・「霞む」・「日の本」・「春」という四つの要素が一致している。先行研究が指摘する憶良の和歌よりも、こちらの方が光厳の和歌に近いといえよう。

『中務卿親王三百首和歌』は、宗尊親王が十九歳の時の定数歌で、「習作期の詠といえるが、万葉集・古今集その他の歌に依拠するところが多<sup>〔注13〕</sup>」という。問題の和歌も『万葉集』の憶良の歌に基づく。藤原為家が当該歌に付した評詞でも本歌を見事に取り込んでいる点が高く評価されており、為家の他、「井」（西園寺実氏）「衣」（藤原家良・三）（藤原行家）・弁（藤原光俊（真観））の合点も付されている。この歌は後に親観撰の『瓊玉和歌集』や、十一番目の勅撰和歌集『続古今和歌集』にも収録されることになる。まさに「宗尊親王の代表作の一つ<sup>〔注14〕</sup>」であった。

この宗尊親王の和歌には本歌があり、それは『万葉集』所収の山上憶良の和歌であったと考えられる。その点では、問題の光厳の和

歌が憶良の歌を「本歌とするか」とする新編日本古典文学全集頭注の指摘自体は誤りではない。しかし、光厳法皇行脚記事において御津の浜で詠まれた和歌は、直接的にはこの宗尊親王の歌を典拠としていると考えられる。さらに、宗尊親王の歌が春の到来を詠んでいるのに対して、光厳法皇行脚記事では、戦乱が続く「春ナラヌ世」を詠む和歌へと仕立て直されているのである。

### 三 光厳のもう一首の和歌

前章では、光厳法皇行脚記事で引かれる和歌一首の典拠を新たに指摘した。これは、当該章段の依拠資料や、成立基盤を探っていく上で一つの端緒となり得よう。しかし、ここで問題となってくるのは、光厳の詠んだとされるこの和歌が、果たして光厳の実作なのかどうかという点である。先行研究でも既に指摘されているように、光厳法皇行脚記事は虚構性の高い章段である<sup>〔注15〕</sup>。このことに着目するならば、御津の浜での和歌は、光厳に仮託された作である可能性が考えられよう。

一方で、和歌を詠んだ後に想起した対句が龍山徳見の作であることよりすれば、当該箇所は光厳の実際の人的環境を反映しているようにも思われる。さらに前章で述べた通り、この章段で描かれる旅路は、光厳の歌人としての側面に関わると見られる。これらを踏まえるならば、光厳の実作を『太平記』が取り込んだとの考えも捨てきれない。

先行研究においても、光厳の歌集に光厳法皇行脚記事の和歌を収録するものがある一方で、そうした和歌を伝承歌とする見解も見られ



る。<sup>(注17)</sup>この問題について、現時点で決定的な証拠を示すことは難しい。しかし、以下の二点からは、この和歌の成立事情を窺知することができる。

まず一つ目は、光厳法皇行脚記事で光厳が詠んだとされるもう一首の和歌が、光厳の実作とは考えがたいということである。光厳が高野山奥院に参籠する箇所を次に挙げる。

其日聽奥院へ御参有テ、大師御入定ノ室ノ戸ヲ開カセ給ヘバ、嶺松含レ風テ瑜伽上乘ノ理ヲ顯シ、山花籠レ雲ヲ赤肉中台ノ相ヲ秘ス。前仏ノ化縁ハ適ヌレドモ、五時ノ説今耳ニ有カト覺ヘ、慈尊ノ出世ハ遙ナレドモ、三會ノ粧ヒ眼ニ遮ガ如シ。三日マデア奥院ニ御通夜アテ、

高野山マヨヒノ夢モサムルヤト其曉ヲマタヌ夜ゾナキ

ト安居ノ間ハ御心静ニ此山中ニコソ御坐アラメト思食テ、諸堂御巡礼アル処ニ……

光厳は奥院に三日間参籠した後、一首の和歌を詠んだ。それは、弥勒菩薩の下生を待ち望むものであった。奥院において弥勒下生を詠む和歌は枚挙にいとまがない。その中にあつて、既に新編日本古典文学全集頭注も指摘するように、この和歌は別の歌人の作に酷似しており、『太平記』諸本の中にはそれを採録しているものも存在する。玄玖本巻二十九「松岡城周章之事付薬師寺遁世之事」、高師直・師泰兄弟の出家を語る箇所を挙げよう。

執事兄弟（筆者注、高師直・師泰）、只朦々トシタル斗ニテ、降参出家ノ儀ニ落伏カケレバ、公義（筆者注、薬師寺公義）、涙ヲハラ／＼ト流テ、「運尽ヌル人ノ分野程浅増キ者ハ無リケリ。我此ヒトノ死ヲ共ニシテモ何ノ高名カ有ベキ。不如、浮世ヲ捨テ、

此人々ノ後生ヲ弔ベシ。哀レ弓矢ノ家ニ生タル身程ニ口惜キ物ハ無リケリ。吉々、守レ義ヲ致レ命ヲヨリハ、出家遁世スルニハ不如」ト思定テ、一首ノ歌ヲ詠タリケル。

取レバ憂シトラネバ人ノ数ナラズ捨ベキ物ハ弓矢ナリケリト彼様ニ詠ジツ、自誓リ押切り、濃墨染ニ身ヲ替テ、高野山エゾ上ニケル。

高野山浮世ノ夢モ覺ヌベシ其曉ヲ松ノアラシニ

ト仏種ハ縁ヨリ起ル事ナレバ、彼様ノ次ヲ以テ浮世ヲ思捨タルハ情ク優ナル様ナレドモ、越後中太ガ義仲ヲ諫煩テ自害ヲ為タリシニハ、無下ニ劣テゾ覺タル。

高師直・高師泰兄弟が足利直義との抗争に敗れて出家しようとした際、その被官として従軍していた薬師寺公義は主君の有様に失望し、自ら髻を切つて高野山に上つてしまったという。そこで公義は二首の和歌を詠む。そのうち傍線を付した一首が、光厳法皇行脚記事で光厳の詠んだ和歌と酷似している。

この歌を詠んだ公義は、出家して元可と名乗つた。歌人としても著名で、二条為定撰の『新千載和歌集』（延文四年（一三五九）、二条為遠撰（為遠没後は為重撰）の『新後拾遺和歌集』（至徳元年（一三八四））といった、二条派の歌人の撰になる勅撰和歌集にも入集している。<sup>(注18)</sup>歌集に永和二年（一三七六）から康暦年間（一三七九―一三八二）の自撰とみられる『元可法師集』<sup>(注19)</sup>があり、そこには右に挙げた『太平記』所引の和歌も収録されている。

高野にすみ侍し比、奥の院に通夜し侍し時、思ひつゞけ侍ける

高野山うき世の夢もさめぬべし其曉を松のあらしに

詞書にある通り、作者が奥院に通夜した折に詠んだものであり、詠歌状況も『太平記』と一致している。『太平記』に描かれる公義の出家は、師直・師泰が直義に敗北を喫した観応二年（一三五一）頃のことと考えられる。この和歌が詠まれた時期もその頃であろう。光厳はまだ存命であり、公義の作を下敷きにして、実際に高野山の和歌を詠んだ可能性は完全に排除できない。

しかし、前述のように、光厳は歌人としては京極派の歌風を守ろうとする立場にあった。『後深心院閑白記』<sup>（注26）</sup>延文四年四月二十八日条には、二条為定が撰者となった『新千載和歌集』への入集を拒否しようとしたことが記されている。

抑法皇（筆者注、光厳）御製入二申之一。仰云、重々有<sup>レ</sup>沙汰一、不可<sup>レ</sup>入申一之由治定了。不思議事也云々。

記主の近衛道嗣はこの入集拒否を「不思議」と評しているが、井上宗雄氏はその背景について次のように論じている。<sup>（注27）</sup>

恐らく光厳及び公蔭父子（筆者注、正親町公蔭・忠季）は二条派の撰集に不満で（更に光厳は世俗を全く捨てた事をも理由としてか）入集を拒否したのではないかと思われる。

このように、光厳の行動には二条派への不満や撰集への無関心があったことが指摘されているわけである。

加えて、光厳らが南朝に幽閉された後に北朝天皇となった後光厳は、それまで持明院統に受け継がれてきた京極派風の和歌を放擲し、二条派風の和歌を詠むようになっていた。<sup>（注28）</sup>深津睦夫氏は、このことが光厳・後光厳父子の不和の一因になったことを指摘している。<sup>（注29）</sup>こうした状況が、晩年の光厳に自身の歌風をより一層強く意識させたことは想像に難くない。

一方、公義については、二条為定を「宗匠」と仰いでいたことや、二条為重・浄弁と交流を持っていたことが『元可法師集』の詞書から知られ、二条派に近い歌人であったことが分かる。<sup>（注30）</sup>今川了俊の『了俊歌学書』<sup>（注31）</sup>にも、

為世卿の門弟等の中には四天王とか云て、かれらが歌ざまを、葉師寺、中条、千秋、秋山など、云し人々、如<sup>二</sup>小師<sup>一</sup>に信ぜしかども……

とあり、公義は二条為世門下のいわゆる和歌四天王（頼阿・慶運・浄弁・兼好）の歌風を仰いでいたという。

こうした歌人としての立場の違いを勘案するならば、公義の和歌に酷似した歌を光厳があえて詠んだ可能性は低いのではなからうか。とすれば、光厳法皇行脚記事において光厳が詠む和歌二首のうち、少なくとも奥院での一首は、光厳の実作とは見なしたいということになろう。

前述のように、当該章段における光厳の旅路は、光厳の歌人としての側面に関わるものと思われる。しかし一方で、右に検討した事例よりすれば、光厳が実際に詠んだ和歌を撰取しようとする意図は薄かったといえよう。もともと、光厳の晩年の和歌はほとんど残されていないので、撰取しようにもできなかったのかもしれない。いずれにせよ、光厳の歌風や歌壇における立場にまでは関心が及んでいなかったとはいえるであろう。以上のことは、光厳が御津の浜で詠んだ和歌が実作であるか否かを判断する上で、一つの手がかりとなる。

#### 四 宗尊親王の和歌を収録する歌集類

御津の浜での和歌の成立事情が窺える二つ目の要素として、この和歌の直接の典拠と見られる歌が、前掲した宗尊親王の私家集や勅撰和歌集以外の歌集類にも見られることを挙げておきたい。最初に、『六花和歌集』<sup>(注28)</sup>の例を示す。本集は様々な勅撰集や私撰集などから秀歌を選びだしたもので、宗尊親王の和歌は巻一「春歌」に収録されている。

続古

中務卿親王

大伴のみ津のはま松かすむなりはや日のもとに春や立ちむ  
『六花和歌集』に収められた和歌の年代は幅広く、古くは『万葉集』から十九番目の勅撰集『新拾遺和歌集』にまで及ぶ。成立は貞治三年（一三六四）以降のことと考えられており、撰者は『万葉集』注釈で名高い由阿であると想定されている。現存写本は島原松平文庫本が知られるのみではあるが、室町期においては連歌師たちにも尊重され、謡曲の詞章の典拠としても利用されていたという。<sup>(注29)</sup>宗尊親王の和歌は、こうした歌集にも採られているのである。

さらにこの和歌は、『六花和歌集』を承けた和歌注釈書『六花集注』<sup>(注30)</sup>にも収録されている。これは『六花和歌集』から難解とされる和歌を抄出し、関連する和歌も加えて注を施したもので、「室町時代頃までにはかなり流布して、歌人・連歌師・古典学者等には案外、利用された」という。<sup>(注31)</sup>該書には、宗尊親王の和歌に以下のような注釈が添えられている。

一 大伴ノ御津浜松カスムナリハヤ日ノ本ノ春ヤタツ覽

万葉集ニイサヤ子等ハヤ日本ハ大伴ノ御津ノ浜松マチ恋ヌラム

ト云歌ヲトリテヨミ給也

当該歌は『万葉集』の憶良の和歌を本歌としているという。『六花集注』は、内部徴証および陽明文庫蔵本の奥書より、貞治五年（一三六六）から宝徳四年（一四五二）までの間に成立したと考えられている。光厳法皇行脚記事の成立上限が光厳七回忌に当たる応安三年（一三七〇）である点よりすれば、この章段が成立した時期には、宗尊親王の和歌だけでなく、この和歌と本歌との関連性もよく知られていたことが推測される。そして、この関連性を知っていれば、二首の和歌を合成することによって、

誰マチテ御津ノハマ松カスムラン吾ガ日ノ本ノ春ナラヌ世ニ  
という和歌は、容易に作り出すことができる。

もちろん、このことがただちに光厳実作説を否定する根拠となるわけではない。しかし、次に挙げる『歌枕名寄』<sup>(注32)</sup>の例は、その有力な傍証となる。『歌枕名寄』は、延元元年（一三三六）までの成立と考えられており、「名所歌集としては空前の規模を有する」ものである。<sup>(注34)</sup>宗尊親王の和歌は、巻十三「難波篇」の「浜」に収録されている。

万一新古十 松

いざこどもはやひのもとへおほとものみつのはま松まち

こひぬらん

右、山上憶良在レ唐憶二本郷一歌

中務卿親王

おほともの三津のはま松かすむなりはや日のもとに春や  
さぬらん

ここからは、宗尊親王の和歌が、御津の浜を詠んだ代表的な和歌として認識されていたことが窺えよう。さらに注目されるのは、『歌枕

名寄』において、宗尊親王の和歌がその本歌と並べて配置されていることである。『歌枕名寄』の主要諸本を見渡してみても、一部の伝本を除けば、ほぼ両歌を同じ順番で配列している。そのため、仮に宗尊親王の和歌が憶良の和歌を本歌とすることを知らなかったとしても、『歌枕名寄』の隣り合う二首を参照しさえすれば、光厳が詠んだとされる和歌を作成することは可能なのである。

しかも、北村昌幸氏が既に指摘しているように、『歌枕名寄』は『太平記』における和歌的表現の有力な源泉であったと見られる。そこで次章では北村氏の論考に基づき、この点について述べていくことにしたい。

## 五 『太平記』と名所和歌

北村氏がまず挙げているのは、巻十五「主上還幸之事付賀茂神主改輔ノ事」のうち、春宮時代の後醍醐天皇が伏見院宮に恋人を奪われる箇所である。

帥宮（筆者注、後醍醐）、此ル事トハ露モ思寄給ハズ、（a）其耳ヤト今日ノ御憑ニ昨日ノ憂サヲ思替テ、度々御使有ケルニ、「思ノ外ナル事候テ、伏見院宮（筆者注、後伏見）ノ御方ヘ被レ召ヌ」ト申ケレバ、（b）親シ去ケズハ（c）東路ノ佐野ノ舟橋（d）其耳ヤハ、堪テハ人ヲ恋渡ベキト、思沈マセ給フニモ……傍線部（a）から（d）の表現のうち、まず（a）は以下の和歌に基づくことが指摘される。

（a）『玉葉和歌集』（一二三八九）

さのみやとけふのたのみに思ひなせば昨日のうさぞ今は

うれしき  
続いて、（b）以下の典拠が示される。

（b）『万葉集』（三四九九・東歌）

（c）『万葉集』（三四九九・東歌）・『続古今和歌集』（一二二九・藤原家隆）

（d）『続拾遺和歌集』（八七一・津守国助）

このように、当該箇所は複数の歌集に収録された和歌に基づいている。もちろん、『太平記』がこれらから和歌を別々に収集してきたと考えることもできる。しかし、北村氏は、「歌枕ごとに秀歌を一括掲載した資料に基づいているのではないか」と、より蓋然性の高い説を示した上で、そうした資料の有力な候補として『歌枕名寄』を挙げている。実際に、『歌枕名寄』の「船橋」の箇所を見ると、『太平記』当該箇所（b）・（c）・（d）の表現の源泉と考えられる和歌が、まとめて収録されているのである。

船橋万十四（筆者注、『万葉集』（三四九九・東歌））

可美都気努 佐野乃布奈波之 登利波奈之 於也波左久礼騰

和波左可流賀倍

後十 源等朝臣

あづまちのさのの舟橋かけてのみおもひわたるをしる人のなき

詞九 霧 駒 左大弁俊雅母

夕ぎりに佐野の舟橋おとすなりたなれの駒のかへりくるかも

一字抄 雪 権大納言公実

あまぎりあひ雪ふりたえぬ東路のさのの船ばし誰にとはまし

建保百首 家隆

もらさばや波のよそにも三輪が崎さのの舟ばしかけしころを

堀百

師頼

今更に恋路にまよふ身をもちてなにわたりけんさのの舟橋

同

顕季

東路の佐野の舟橋くちぬらんいもしさだめばかよはざらめや

続古三 五月雨

祐成朝臣

五月雨に水かさまさりてうきぬればさしてぞわたるさのの舟ば  
し

同十三

家隆

あづまのさのの船はしさのみやはつらきころをかけたの  
まん

続拾十二

津守国助

さのみやはさのの船橋おなじ世にいのちをかけて恋ひわたるべ  
き

右の『歌枕名寄』『船橋』を踏まえ、北村氏は『太平記』当該箇所  
の成り立ちを以下のように推測する。すなわち、(a)の「さのみや」  
から歌枕「佐野の舟橋」が想起され、そこからまず『万葉集』三四  
九九番の和歌が参照された。この『万葉集』の和歌は、後醍醐の悲  
恋を語る『太平記』当該箇所の内容にも合致している。さらに『歌  
枕名寄』には、「東路の佐野の船橋」という定型句を含む和歌が並ん  
でおり、最後に「さのみやは」・「恋ひわたるべき」という表現を含  
む和歌に辿り着く。そして、この和歌に含まれる反語表現が、『太平  
記』当該箇所(d)の部分へとつながっていくことになる。

このように、『歌枕名寄』を念頭に置くことで、当該箇所における  
和歌的表現の成立過程をよく説明し得ることが指摘されているので  
ある。同様の例は、『太平記』の他の箇所にも見られるという。この

北村氏の分析よりすれば、『太平記』は『歌枕名寄』のような名所和  
歌を参照し、一箇所にまとめられている複数の和歌を組み合わせて  
和歌的表現を生み出していたと考えられる。そしてこの手法は、前  
章で指摘した、光厳の和歌を容易に生成し得る手法と軌を一にして  
いるといえよう。

こうした先学による研究成果も併せ考えると、御津の浜での光  
厳の和歌は、光厳の実作というよりも、『歌枕名寄』といった資料に依  
拠し、宗尊親王の和歌と『万葉集』の憶良の歌とを組み合わせるこ  
とで作りに出された歌であったと思量される。右に挙げた先行研究で  
は、和歌的表現を用いた文飾に絞った分析が行われている。しかし、  
ここまでの本稿の考察からは、名所和歌の利用はそれだけにどま  
らず、複数の和歌から一首の和歌を合成し、さらにその歌を光厳に  
仮託した可能性をも指摘し得るのである。

#### おわりに

本稿では、光厳法皇行脚記事の中でも、光厳が高野山へと至る道  
中の記述に焦点を置き、考察を進めてきた。当該箇所からは、和歌  
的要素に対する高い関心を窺うことができる。そしてこのことは、  
光厳の歌人としての側面と密接な関連を持つと考えられる。一方で、  
光厳が詠んだとされる和歌については、新たな典拠の指摘によって、  
当該歌が光厳の実作というよりも、『歌枕名寄』のような資料を参照  
し、光厳に仮託して作成された和歌と見られることを示した。前章  
で述べたように、『太平記』がこうした手法によって和歌的表現を生  
み出していることについては、既に先行研究でも指摘されるところ



である。その点で本稿は、先行研究の範疇を大きく超えるものではないかもしれない。

しかし、前稿と本稿の考察からは、『太平記』が和漢の要素を取り合わせて文章を紡ぎ出していく、その具体的な材料と手法の一端を窺うことができた。ここからは、さらに以下の疑問が浮上してこよう。すなわち、『歌枕名寄』のような資料を活用して一首の和歌を仕立て、かつ光厳と同時代の禪僧による漢詩句を取り合わせて歌枕の叙景をなし得る環境とは、一体いかなるものであったのか。この問題について検討するには、今後『太平記』における禪僧の詩の受容に加え、名所和歌類の受容のありようを浮き彫りにし、さらにそれらが交差する場を見定めていく作業が求められよう。

加えて、光厳法皇行脚記事は本稿で取り上げた旅路を経て、主な舞台を高野山に移すことになる。高野山上での出来事に大きな分量が割かれており、かつ光厳の二首目の和歌も、高野山で詠まれたものである。当然、本章段と宗教的な環境との密接な関わりが予想される。前稿でもそうした考察の必要性には言及したものの、今回もこの点を視野に収めた検討にまでは至らなかった。後考に期したい。

## 注

- (1) 『太平記』本文の引用は、前田育徳会尊経閣文庫編『玄玖本太平記』（勉誠社、一九七三―七五）に拠る。以下、文献の引用に際しては句読点等を補うなど、私に表記を改めた点がある。

- (2) 現時点で典拠未詳のものとして、以下の箇所が挙げられる。

① 来無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>至、去無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>從。拄杖頭辺ニ活路通。

② 花落テ為<sub>レ</sub>雪ドモ笠ハ重コト無ク、深樹謬<sub>レ</sub>昏ドモ、日未ダ傾カズ。  
③ 嶺松含<sub>レ</sub>風テ瑜伽上乘ノ理ヲ顯シ、山花筈<sub>レ</sub>雲ヲ赤肉中台ノ相ヲ秘ス。

④ 山果庭ニ落テ朝三ノ食秋風ニ飽キ、柴火爐ニ宿シテ夜薄衣ノ寒氣ヲ防グ。

⑤ 吟肩骨瘦テ泉ヲ擔ニ懶キ時ハ、石鼎ニ雪ヲ湘テ三椀ノ茶ニ清風ヲ飲シ、仄歩山嶮シテ廠ヲ折ニ倦時ハ巖窓ニ梅ヲ嚼デ一聯ノ句ニ閑味ヲ甘ジ給フ。

⑥ 得ニ身心一処即心安シ。出レバ有<sub>二</sub>江湖一、出レバ有<sub>二</sub>山ト、一乾坤ノ外ニ逍遙ヲ成シ、破タル蒲団ノ上ニ光陰ヲ送ラセ給ヒ……

⑦ 焼痕廻<sub>レ</sub>緑テ春容早ク、松影ノ穿紅ヲ日脚西ナリ。

- (3) 拙稿『太平記』光厳法皇行脚記事における詩句利用——典拠未詳対句を中心に——（関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓 第六集』和泉書院、二〇二二年十二月）。以下、本稿中で「前稿」という時は、この拙稿を指す。

- (4) 引用は、『五山文学新集』に拠る。

- (5) 北村昌幸『太平記』の表現——方法としての和漢混淆文——（松尾葦江編『軍記物語講座第三卷 平和の世は来るか 太平記』花鳥社、二〇二〇年）。

- (6) 注（5）北村氏論文では、光厳法皇行脚記事の他に以下の例が挙げられている。

①「日野俊基東下りの記事（巻二）」

②「万里小路藤房通世記事（巻十三）」

③「足利直義籠居記事（巻二十七）」

注（5）に同じ。

（8）光厳の主な伝記としては、以下のものが挙げられる。赤松俊秀・上

横手雅敬・国枝利久編『光厳天皇遺芳』（常照皇寺、一九六四年）、岩佐美代子『光厳院御集全釈』（解説（風間書房、二〇〇〇年）、飯倉

晴武『地獄を二度も見た天皇 光厳院』（吉川弘文館、二〇〇二年）、

深津陸夫『光厳天皇 をさまらぬ世のための身ぞうれはしき』（ミネ

ルヴァ書房、二〇一四年）、芳澤元『光厳天皇——南北朝動乱に翻弄された人生』（久水俊和・石原比呂編『室町・戦国天皇列伝』戎光

祥出版、二〇二〇年）。

（9）光厳親撰の『風雅和歌集』（引用は、石澤一志『風雅和歌集校本と研究』（勉誠出版、二〇一五年）に拠る）巻十七雑歌下には、伏見・光

厳・後醍醐の述懐歌が並んでいる。光厳の作として、次のような歌も収録されている。

雑歌の中に

太上天皇

てりくもりさむきあつきも時として民に心のやすむまなし

（中略）

百首歌の中に

太上天皇

おさまらぬ世のための身ぞうれはしき身のための世はさもあら

ばあれ

一首目は天候により左右される民の身を案じ、二首目は自らの治世が静まらないことへの愛いを詠む。

（10）『太平記』における光厳の形象については、長坂成行氏による簡にし

て要を得た指摘がある。すなわち、『太平記』における光厳の描写は

「後醍醐に比すべくもない生彩を欠くものである」が、光厳法皇行脚

記事における「行脚生活の形象のみは精細かつ生々としており、こ

こにこそ『太平記』における光厳院の存在意図が凝縮されているか

の如くである」という（『太平記』終結部の諸相——光厳院行脚の事、をめぐって）『日本文学』第四十巻第六号、一九九一年六月）。

（11）引用と訓み下しは、新編日本古典文学全集に拠る。

（12）引用は、新日本古典文学大系に拠る。

（13）注（12）新日本古典文学大系解説参照。

（14）和歌文学大系38『続古今和歌集』（藤川功和・山本啓介・木村尚志・久保田淳、明治書院、二〇一九年）補注参照。

（15）当該章段の虚構性について述べた主な先行研究としては、以下のものが挙げられる。兵藤裕己『『太平記』——情況と言葉——』（『日本文学講座4 物語・小説I』大修館書店、一九八七年）、前掲『『太平記』終結部の諸相——光厳院行脚の事、をめぐって』、小秋元段

『『太平記』巻三十九・四十成立試論』（『三田国文』第十七号、一九九二年十二月）。

これら先行研究では、次の四点が史実と齟齬することが指摘されている。

①『『太平記』は、実際には光厳らが南朝に拉致された年である正平七年を光厳帰京の年とする。

②光厳の高野山・吉野への旅は、同時代史料からは確認できない。

③光厳の葬儀を執り行った人物は、光明院・承胤法親王ではなく春屋妙葩であった。

④『『太平記』は光厳三回忌の仏事を詳述するが、その記載内容は七回

忌の仏事を踏まえたものである。

(16) 注(8)『光厳天皇遺芳』参照。

(17) 注(8)『光厳院御集全釈』「解説」参照。

(18) 主要諸本における当該和歌の有無は左表の通り。

分類	有	無
甲類	玄奘本・神宮徴古館本・内閣文庫本	西源院本・梁田本
乙類	梵舜本	米沢本・益田本
丙類	天正本・教連本・野尻本	
丁類	京大本	

(19) 『和歌文学大辞典』「元可」の項(平田英夫氏執筆)参照。また、公

義の武士としての事跡については、菊地卓「葉師寺公義について」

(『国学院雑誌』第七十二巻第三号、一九七一年三月)に詳しい。

(20) 引用は、『新編国歌大観』に拠る。

(21) 引用は、『大日本古記録』に拠る。

(22) 井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期 改定新版」(明治書院、一

九八七年(初版は一九六五年))。

(23) 二条良基の「近來風躰」(引用は、『歌論歌学集成』に拠る)には、二

条良基と尊円の勧めによって、後光厳が二条為定の歌風に倣うよう

になったことが記されている。

後光厳院殿為定卿のやうをよませ給しことは、愚身・青蓮院宮

申沙汰によりて如レ此詠せしめ給なり。御流の伏見院様はすてら

れき。いかさまにも異風は不吉の事なり。

良基は、持明院統伝来の「伏見院様」すなわち京極派の歌風が「不

吉」であると断じている。この箇所について、『歌論歌学集成』では

小川剛生氏による以下の注が付されている。

光厳・光明・崇光の三上皇が風雅集完成後まもなく正平一統に

際会し、南朝に拉致監禁された悲劇を踏まえた発言であろう。京

極派への決定的な負の評価として長く記憶されることになる。

このように、光厳親撰の『風雅和歌集』完成後に、光厳その人が拉致

された事実を踏まえた記述であることが指摘されているのである。

(24) 注(8)『光厳天皇』をさまらぬ世のための身ぞうれはしき』参照。

(25) 注(19)『和歌文学大辞典』「元可」の項参照。

(26) 引用は、『未刊国文資料』に拠る。

(27) 注(8)『光厳院御集全釈』では、親応の擾乱後の光厳の和歌は、文

和三年に詠まれた四首と、これと関連する『新千載和歌集』二二三

六番歌のみであることが指摘されている。

(28) 引用は、『古典文庫』に拠る。

(29) 『和歌文学大辞典』「六華和歌集」の項(伊藤伸江氏執筆)参照。

(30) 引用は、『古典文庫』(蓬左文庫本)に拠る。

(31) 注(30)『古典文庫』「解題」(三村晃功氏執筆)参照。

(32) 注(10)長坂氏論文等参照。

(33) 引用は、『新編国歌大観』に拠る。

(34) 『和歌文学大辞典』「歌枕名寄」の項(黒田彰子氏執筆)参照。

(35) 本稿で引用に用いた『新編国歌大観』は、万治二年刊本を底本とし

ている。これは『歌枕名寄』諸本中最も多く和歌を収録している。

該書のその他の伝本については、渋谷虎雄「校本歌枕名寄 本文篇」

(桜楓社、一九七七年)が水青文庫本を底本として、宮内庁書陵部本・

静嘉堂文庫本・高松宮家本・佐野文庫本・内閣文庫本・京都大学付

属図書館近衛本・澤瀉久孝旧蔵本・天理図書館本(旧西荘文庫蔵・

天理図書館本(旧竹柏園蔵)・陽明文庫本を対校している。これらの

うち、憶良の和歌と宗尊親王の和歌を欠くのは、永青文庫本と、残欠本である陽明文庫本のみである。

(36) 北村昌幸「『太平記』の引歌表現とその出典」(『太平記』国際研究集

会編『太平記』をとらえる 第一卷) (笠間書院、二〇一四年)。

(37) 引用は、『新編国歌大観』に拠る。

(38) 卷十「新田義貞謀叛之事付天狗催越後勢之事」において、武蔵野の叙景が同様の手法によると見られることが指摘されている。

※本稿は、JSPS科研費(基盤研究(C) 課題番号22K00332)による研究成果の一部である。